

むくまら兩宮へ此奉公を請望申す。始にほくとえうつく  
御許容たるのりたる。別心なきよしきぬ。くり欺きし  
らく。數度懇<sup>ネギ</sup>に請ひ申す。然るにやま。武家の悪  
しき深き。赤松が方ぎぬの者どもなれた。實<sup>コト</sup>に奉公を望免  
るも其あやまりありと。漸<sup>シ</sup>御許容の御りき賜た。ま  
り。まも大勢一同に参り。猶御隔心あらむ事を憚  
り。間島彦太郎。上月左近將監。中村彈正忠。同次郎。上野小  
次郎。平瀬彦左衛門尉。同小太郎。小谷與次等引分ま。兩宮  
の御在所に伺候し。其餘<sup>ホカ</sup>の者ども。山中所くよ打散たの  
び居て。なほも時次ぞ待く。ひく。うく。明る長祿元

丁年。十二月山中雪深。うま。官方にあり。やうか  
がひく。夜懸よせむと云ひ合き。同二日の夜一揆の者ど  
も二手に分ま。密に兩宮の御在所へ打向ふ。まづ一手は  
大河内の御在所へ子の刻むのりり行着て。密に御殿に忍  
び入る。丹生屋兄弟して尊秀王侵害し奉る。中村彈正忠御  
頭<sup>カ</sup>を賜る。或<sup>シ</sup>中村太郎。四郎とも云。やがく神璽を取奉る。引退く  
る。此宮の伺候人を始め。吉野十八郷の者ども起立  
く追懸け。寄手雪よあつて引く。伯母谷<sup>フクノ</sup>と云  
ふ處に追ひえ。丹生屋兄弟。中村彈正忠。同太郎四郎等を  
討了ら。此時宮の伺候人井口太郎左衛門と云ふ者。心を

やく計らひく。再神璽を奪て返し奉るぬ。尊秀王の御頭を  
ハ。雪に埋きて隠したるけり。血に染みくちるけり。心  
成見つゝもちもほく取返してきり。ほく河野谷へ向ひ  
きる一手も。同じく夜半はるまゝ。御在所に忍入る。間島彦  
太郎忠義王成捕へ奉る。上月左近將監御頭を賜るけり。引  
退く。此時その宮方け者ども出合て。寄手八人討るをぬ。上  
月へ遁げ退きく。宮方少は伺候人宇野大和守。高野山の  
智莊嚴院の弟子僧定順まゝ。次郎太郎と云ふ者合せて四  
人討死せり。以上上月記。赤松記。應仁別記。南方紀傳等参考。  
王の御事を同じく度のもちり。今吉野は山中高原村高峯  
く記しきる。そのゆかりなり。

山福源寺に古碑ニあり。一宮自天親王。一宮小太二  
宮忠義大禪定門と誌したるが在り。とど。兩宮の御墓所もど  
あり。あ。あ。の二碑の事を。大日本史も。有一古牌記曰一  
宮云々二宮云々と記すれり。○巡將録附録。吉  
野の事書たるもの。今吉野は七保九箇村と云ふ處あり。  
其に東川村。西河村。大瀧村。寺尾村。入谷村。迫村。高原村。人知  
村。白屋村と云る。此村は寶物としり守護するものあり。  
宮の御兜赤銅金の筋あり。金の鍔形。金の龍頭。正平草の  
吹返たり。御位牌ニあり。つた南朝一宮自天禪定法皇。つた  
南帝王。二宮忠義禪定法皇と誌しり。又長祿元年御事あり。全  
く時宮の御頭。並に御鑑を取返したるも。子孫あり。子  
筋目の者と云る。毎年二月五日祭禮あり。九箇村あり。又  
る。あ。あ。れを行ふ。筋目の者其行事をつとむる例なり。又  
六保九箇村あり。中興村。和田村。神野谷村。拍木村。上多  
古村。上谷村。大迫村。柏谷村。今波村と云ふ。此村は宮の  
御鑑。御太刀。御長刀の類。寶物としり傳り。あ。あ。も  
毎年二月五日祭禮あり。其式七保と同じ。又四保五箇村と  
云ふ。井戸村。武木村。碓村。下多古村。白渡村あり。此村は小

しつゝの宮の御鑑の両袖を寶物とす。祭日祭式等と云ふ。右  
よ云ふる村くと相同ト。さう其村くは山中の宮の御自害  
の舊蹟と云ふ。彼此に在る。見えたる由記されり。按る  
その筋目の者と云ふ。ゆゑに井口太郎左衛門が齋ある。さし  
さう件は廿三村の山里人。今此世まで。彼宮くをさば。の  
り尊ひ慕む。祭奉まる真心の厚事。ゆゑにあられある  
こと

○其後南方官方の者ども。猶も思ひよるる事なり。楠正理  
等尊義王の第三は御子尊雅王を取立奉り。神璽を上り。  
潜り大和に十津川にたも。明弘長祿二寅年六月。  
まゝ吉野の山奥に御在所を構へ。遷し坐せまらるる  
り。按る事企てきまらるる尊義王。又その第一の御子の尊秀  
王と稱する御名の尊字は。御祖後醍醐天皇は御名尊治  
と稱したる。ゆゑに受けき。ゆゑに御意ある。第二  
の御子忠義王は。尊字を憚り。御父尊義王は義字を襲き

用ひらむ。ゆゑに。あつるを第三の御子と稱し。尊雅と  
稱し。ゆゑに。尊秀王と稱し。あつるゆゑに。後其御志を継  
む。神璽を擁ちたまはるる。ゆゑに。あつる。あつる。小  
尊字は御名に付き。あつる。あつる。あつる。あつる。  
越智の雜掌として。大和の國內に在る。國人越智某。小  
河中務少輔と議り。間島衣笠等と共に。其宮に御在所を  
襲ひ。ゆゑに。其處を遁まらるる。ゆゑに。十津川に遷り。小  
寺等追續する。ゆゑに。攻ける。八月廿七日の夜。ゆゑに。  
其處をうち破らる。尊雅王痛手を負ひ。吉野の北山なる。  
高野上の高福寺に遁ま坐し。ける。御創の惱重として。遂  
に其處めて薨じ。ゆゑに。高福院と謚たす。ゆゑに。坐す。  
此寺の。ゆゑに。又神璽也。ゆゑに。御事なく坐す。

しける哉。此時小寺藤兵衛入道性説等が手に字返し奉る  
ぬ。尊雅王の薨り事神璽を守返し奉る時の事諸  
書に記せる趣混雜しきを上月記楠氏系圖南方紀傳南  
朝紹運圖等を相證し参考する記せる。但し此時の事上月  
記を何の宮と云ふ事を記さば南方紀傳も尊秀王と  
混る記せり。大日本史に引ける楠氏系圖又南朝紹運  
圖に記せる趣實は符をり。その楠氏系圖正理に譜に  
此時南帝後醍醐帝四代孫也。赤松某及取神璽之後十津川  
皇居破而崩於北山高野上高福寺と記せる。此時の事を  
云ざるのみ。三宮尊雅王の御事として事實明證なり。然る  
に後醍醐帝四代孫也と云ざるは。つぐまの王として  
世數合ひのまじし楠氏の子孫此系譜記せる頃の謬傳なる  
をしまし其譜より考ふる。後醍醐天皇の皇子  
後村上天皇より數始し尊義王尊秀王尊雅王の三代は  
よがし。四代孫とのなるのみ。然らば古書に  
世系より祖とせる人の名或擧げ其人の子たり世數をうご  
へ。若于世孫をも書る例は。後醍醐天皇を御祖と  
し。御世數をも後村上天皇より計るべき。又後  
龜山天皇ハ北朝と御合體して吉野を出る還幸し移る

は。南方紀傳に尊雅王の御事を後醍醐帝より五代より  
にび。南方紀傳に尊雅王の御事を後醍醐帝より五代より  
御代より尊義王を加へ。及尊秀王尊雅王御兄弟を連結し  
一代の事なり。申さる。此王たちの世數をどのに  
よのつ。ある。申さる。此王たちの世數をどのに  
心ある。考ふる。大日本史に。件は。楠  
氏系圖を引く。一宮自天王と申さる。尊雅王の御事より  
記され。校者の訂正。尊雅王の御事より  
系譜の文。按ず。正理も尊雅王の御事より  
く。尊雅王以南帝と稱ひ。十津川皇居と云ふ。其氏人  
の筆。猶た。赤松某及云く。書したる。其氏人  
の遺。間島衣笠  
等供奉。醍醐三寶院の天神堂に置奉る。同卅日都に参  
上。此由三條内府。武家へも申さ。即日神璽内裡に  
ミ。天皇歡感め。坐し。即日神璽内裡に

○残櫻記上

○五

此より内裡土御門

と在り。上は注るるの如く。嘉吉三年炎上此後。より新造ありき。歸入らせき。はぬ。明德の神器御帰座の例。小准へ多ひ。神璽御帰座の儀式となむ。免るる。遂行は。まよける。河かか。とあねたふと。あま

後花園院、天皇の大御世 足利義政公の事なるをりける。

此後もなほ南方は残黨事を謀り。事ありと。きあえきり。其より。天地根元。歴代圖。寛正元年二月。大地震。國々兵革多し。旱魃大風。洪水。五穀不熟。大飢饉。人民六畜多餓死。時將軍義政任。吾采糶。不知人民之餓死。耽自重職。不知天下之飢饉。朝暮營造殿。嚴宮。栽花植草。南殿作山水。自所集磐石。徒費國民力量。帝聞此事。以一首詩諫。義政云。殘民爭採首陽薇。處々閔廬鎖竹扉。詩興吟酸。春二月。滿城紅綠為孰肥。義政頂戴此御包。即止。普請。と。えきり。帝は後花園院天皇の御事なり。件の御製の起句。よ依る。その。の。南方は残黨のあり。うぬ。年。下。此志の趣。う。推察らる。形。又東寺。古。文書の中。寛正二年。己年。廿一口。方評定引付帳。二月十八日。此記。就。畠山右衛門御對治事。自公方様被成。下御内書。

於高野仍為寺務。被傳達寺家。自當寺可。任高野山之由。一昨日。被申送云。御書云。義就事可。誅罰之由。被成。下。綸旨之條。度。雖仰遣。于。今。依。有。延引。近日。及南方同意。企之處。當山。族少。々。令。與。力。之。旨。有。其。聞。頗。緩。怠。之。至。不。可。追。天。譴。所。詮。出。現形。之。輩。者。加。嚴。制。致。忠。節。者。可。被。行。恩。賞。也。正月廿三日。御判。金剛峯寺。衆。徒。中。と。えきり。又高野山金剛峯寺。藏。書。源。義。就。依。令。没。落。南。方。蜂。起。云。不。移。時。日。可。被。追。討。早。屬。左。衛。門。督。政。長。朝。臣。手。抽。軍。忠。可。為。神。妙。若。於。敵。同。意。之。輩。者。可。被。處。嚴。科。者。綸。命。如。此。悉。之。以。狀。九。月。廿。八。日。右。大。辨。金。剛。峯。寺。衆。徒。中。と。えきり。其。時。の。あ。り。其。後。文。正。元。年。の。あ。り。山。名。宗。全。が。申。請。の。あ。り。義。就。赦。免。得。く。熊。野。北。山。より。出。て。上。洛。さ。る。由。應。仁。記。に。あ。り。又。神。璽。御。帰。座。の。後。六。年。を。經。る。寛。正。六。年。十。二。月。廿。六。日。赤。松。一。松。九。十。二。歳。の。時。元。服。し。將。軍。足。利。義。政。公。の。名。の。一。字。殘。賜。ひ。る。赤。松。次。郎。政。則。と。名。の。ら。せ。う。給。御。内。慮。の。仰。り。罪。科。御。赦。免。あり。政。則。に。は。加。賀。國。河。北。石。河。二。郡。を。備。前。國。新。田。庄。其。の。御。兼。約。の。あ。り。領。地。の。賜。ふ。由。綸。旨。に。御。教。書。を。添。く。下。さ。れ。る。然。る。に。世。の。中。の。あ。り。亂。ま。る。る。を。り。か。ら。あ。り。全。く。領。地。を。知。行。さ。る。事。あ。り。御。内。書。

と功くくするほど山名左衛門督源持豊入道宗全赤松が家  
に奮き遺恨ありて其家の再興する事を思ふくを  
区さんと思ふ下心出来りし故に政則が家人小此度の  
擧をも専と謀る万は憑たをく石見太郎左衛門尉をひそ  
みの辻切死せしむ殺ちてけり又細川右京大夫源勝元を  
も恨むる事の何ぞも勝元政則と親しむるは山名  
せくあはれに悪るより事起り互に際出来りしは山名  
方細川方より武士ども二方立分きてひそむる應仁の  
大乱となりて年経多ほど持豊勝元相續り病死し終つ  
うら世もや静まりたり政則領地の乱を鎮多て知行  
きむとさるる猶治むるにあはれはひそむるもあはれ明  
應五年四月廿五日政則病死し其家漸に衰微けり以上  
上月記天地根元歴代圖皇年代畧記裏書赤松記嘉吉記續  
神皇正統記應仁別記南方紀傳南朝紹運圖康富記齋藤親  
基記赤松系圖楠氏系圖足利家官位記東寺廿一口方引付  
帳寛正製天神神祇王代記福源寺古碑銘南山巡狩録附録  
等参 抑嘉吉三年の禍事と九月廿四日神璽禁裡と出せ  
終ひくよる長祿二年八月廿九日および十六年の年月戌經

今かく御座坐す。三種の神寶をぞく相備り終  
むあり。かくても猶世の乱に治らざりしこと。朝廷より  
再あたる御事なりて年経るほど天照坐大御神の御慮  
形もほし。東照神御祖命出治ひ。初より御志を定む。天皇  
のまもり畏み終ひ。神々も御祈あまて。く殊ある御勲  
功坐す。天下太平け。安國と治り行天津日嗣も神  
寶も堅石は常石不動形鎮座坐す。はもやあり然ある  
べき理あがら。はも尊き御事なり。と言ひを毛はら形も  
御事もぞ有き。さく立くをり。熟し思ひます。その  
あ。南朝の皇威の漸く衰へさせたまひはくも。猶三代

うけく正しき天津日嗣知し名し。都近き吉野の山に行宮  
よたりし坐し。そもまゝに御軍人を出し形どし。都を  
さうかぐりせきまうひきつて。北朝がつふとまゝに。大ある  
世のまづらひなりをた。武家よりあまの軍人をさし  
あけく。そま奉らむあとい難かるまじく。於のまじき  
あひ形りける也。然しもえせむ。つむは御和陸御讓位と申  
ま御事小御中まま仕奉まふ。然まのあひまうく大義まを  
むきくあるあまの。そらたれまうくして。憚り奉まする意も有  
はら先どむ。終くと神器は御あやまもあむむしとむ。深く  
畏る奉まするふ故ふしそいあまうなるべし。このくしてその

御讓位の後。あま記とるどく。南方に宮がく軍を起し。  
内裏に乱入す。畏くも天皇と驚奉ま。はく神璽を犯し奪ま  
奉まする。あまはく上もあまき御大事なるあうへ。其罪惡  
いと重うた。速う官軍を差むるも。神璽を守返し奉ま。宮  
宮をも捕まらせ。其方まはの武士どももた。あまはく  
く誅はくべき事なるのし。誅は彼宮方。いや微ある御勢  
たもあまた。たやまうはづきまはあま。十年も多うあま  
るは。然てあまも。むくまら神璽は御あやまあむ  
事成畏ま。かよあひ時をほちうわひ。ひく有経しもの  
形りま。さあひくどい。あやま御あま形るる也。

乱世の極<sup>ト</sup>の。き<sup>ト</sup>足利がともがられ心あも。神寶<sup>カミタカラ</sup>をを  
 神寶として。志のまがふ其尊<sup>ミコ</sup>御事<sup>ミコト</sup>成<sup>ナリ</sup>。とけまはてざりは  
 るた。ゆきも畏<sup>オソ</sup>いとも尊<sup>ミコ</sup>皇國<sup>ミコクニ</sup>がらよむありける。さ  
 てしものまが君を裁<sup>ココロ</sup>せる。赤松のともがらが。其罪<sup>ミナ</sup>あが  
 めをもと<sup>ト</sup>命<sup>イノチ</sup>よかきゆきづき<sup>ツキ</sup>。ゆき<sup>ツキ</sup>守返<sup>モリヘ</sup>して奉  
 る事<sup>コト</sup>り<sup>ト</sup>凶事<sup>アガコト</sup>吉事<sup>ヨコト</sup>行<sup>ユク</sup>ら<sup>ト</sup>幽理<sup>カクレ</sup>の行<sup>ユク</sup>き<sup>ス</sup>るも  
 神<sup>カミ</sup>の大御護<sup>オホミモリ</sup>の著明<sup>イサシム</sup>く。ゆき<sup>ツキ</sup>も尊<sup>ミコ</sup>き御事<sup>ミコト</sup>ふ<sup>ト</sup>せ<sup>ト</sup>あ  
 る事<sup>コト</sup>。今此書<sup>イマココロ</sup>み記<sup>イハシ</sup>せる嘉吉三年<sup>カキキニシ</sup>よりあ<sup>ト</sup>れ<sup>ト</sup>御禍<sup>ミコガ</sup>  
 事<sup>コト</sup>。南方<sup>ミナミ</sup>の宮<sup>ミヤ</sup>が<sup>ト</sup>の御子<sup>ミコ</sup>の継<sup>ツギ</sup>く。又その方<sup>カタ</sup>ぎぬ<sup>ト</sup>ゆ<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>

ぬ<sup>ト</sup>もの<sup>ト</sup>。ゆき<sup>ツキ</sup>の末孫<sup>オシゴ</sup>までも。猶<sup>ナカレ</sup>そのあ<sup>ト</sup>みの御事<sup>ミコト</sup>でも  
 け<sup>ト</sup>憤<sup>イライ</sup>る<sup>ト</sup>。ゆき<sup>ツキ</sup>の年<sup>トシ</sup>経<sup>ケル</sup>後の世<sup>ノヨ</sup>までも。た<sup>ト</sup>ほ<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>り<sup>ト</sup>  
 と<sup>ト</sup>ある事<sup>コト</sup>形<sup>カタ</sup>く志<sup>ココロ</sup>をゆき<sup>ツキ</sup>し。命<sup>イノチ</sup>をさ<sup>ト</sup>し<sup>ト</sup>ゆき<sup>ツキ</sup>を<sup>ト</sup>さ<sup>ト</sup>ば<sup>ト</sup>  
 里<sup>サト</sup>ふ<sup>ト</sup>ま<sup>ト</sup>ひ<sup>ト</sup>たり<sup>ト</sup>つる<sup>ト</sup>。既<sup>スデ</sup>に御<sup>ミコ</sup>和睦<sup>ワコ</sup>御讓位<sup>ミコノミヤウキ</sup>の後<sup>ノチ</sup>あ<sup>ト</sup>り<sup>ト</sup>ん。  
 ゆき<sup>ツキ</sup>大義<sup>オホタカヒ</sup>よ<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>ま<sup>ト</sup>さ<sup>ト</sup>る<sup>ト</sup>所<sup>トコロ</sup>為<sup>ナリ</sup>ある事<sup>コト</sup>。論<sup>イハシ</sup>ふ<sup>ト</sup>ま<sup>ト</sup>でも<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>ら  
 ぬ事<sup>コト</sup>形<sup>カタ</sup>が<sup>ト</sup>ら。其<sup>ソノ</sup>真心<sup>マコトノココロ</sup>に<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>り<sup>ト</sup>ざ<sup>ト</sup>せる<sup>ト</sup>ゆ<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>む<sup>ト</sup>き<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>深<sup>フカ</sup>の<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>ら  
 る<sup>ト</sup>ゆ<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>れ<sup>ト</sup>なる<sup>ト</sup>こ<sup>ト</sup>ふ<sup>ト</sup>し<sup>ト</sup>ゆ<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>ら<sup>ト</sup>る<sup>ト</sup>。  
 義弘<sup>タカヒロ</sup>討死<sup>ウチシ</sup>兵降<sup>ヒノシ</sup>泰<sup>タカ</sup>の事<sup>コト</sup>を記<sup>イハシ</sup>せる處<sup>トコロ</sup>。楠木<sup>スナギキ</sup>二百餘<sup>ニヒヤクニ</sup>騎<sup>キ</sup>今<sup>イマ</sup>ま  
 ぞ<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>御敵<sup>ミコノトク</sup>も<sup>ト</sup>今<sup>イマ</sup>更<sup>ス</sup>降<sup>シ</sup>泰<sup>タカ</sup>申<sup>マウ</sup>さ<sup>ト</sup>む<sup>ト</sup>こと無<sup>ナシ</sup>益<sup>トク</sup>なり<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>。  
 大和<sup>タカチ</sup>路<sup>チ</sup>よ<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>ゆ<sup>ト</sup>を<sup>ト</sup>行<sup>ユク</sup>方<sup>カタ</sup>不<sup>シ</sup>知<sup>ラ</sup>落<sup>チ</sup>失<sup>シ</sup>ぬ<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>あり<sup>ト</sup>。又<sup>マタ</sup>應仁<sup>オウニ</sup>別記<sup>ワケキ</sup>よ<sup>ト</sup>。  
 應仁<sup>オウニ</sup>二年<sup>ニニ</sup>六月<sup>リク</sup>廿九<sup>ニユ</sup>日<sup>ニチ</sup>。世<sup>ヨ</sup>傳<sup>ツタ</sup>將<sup>マサ</sup>輝<sup>ヒ</sup>の敵<sup>トク</sup>與<sup>ヨ</sup>力<sup>チカラ</sup>楠<sup>スナギキ</sup>原<sup>ハラ</sup>城<sup>シロ</sup>落<sup>チ</sup>也<sup>ナリ</sup>と<sup>ト</sup>。  
 え<sup>ト</sup>り<sup>ト</sup>。右<sup>ミダ</sup>楠<sup>スナギキ</sup>氏<sup>シ</sup>二<sup>ニ</sup>入<sup>イ</sup>とも<sup>ト</sup>名<sup>ナ</sup>ゆ<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>考<sup>カウ</sup>へ<sup>ト</sup>ゆ<sup>ト</sup>此<sup>ココ</sup>二<sup>ニ</sup>  
 人<sup>ヒト</sup>を<sup>ト</sup>保<sup>ホ</sup>足利<sup>アキラ</sup>の敵<sup>トク</sup>對<sup>タイ</sup>せ<sup>ト</sup>ふ<sup>ト</sup>こと<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>ら<sup>ト</sup>る<sup>ト</sup>ま<sup>ト</sup>は<sup>ト</sup>る<sup>ト</sup>

○磯櫻記上

○五

應永記よ。應永六年大内



芳野山花の多岐にわたる御所を記す

南方宮畧系

●● 後醍醐天皇 御名尊治

●● 後村上天皇 御名義良

●● 後龜山天皇 御名煥成

第六皇子 說成親王 上野大守 称上野宮 後出家護性院宮

義有王 出家圓滿院門主大僧正圓悟或称圓胤法親王後還俗  
文安四年十二月廿二日於紀伊國湯淺城戰薨

教尊 勸修寺大僧正

第二皇子 小倉宮 尊義王 出家万壽寺宮因後還俗南方称太上天皇  
嘉吉三年九月廿五日於延曆寺中堂戰薨

● 尊秀王 犯擁神璽称北山宮或称南方新皇或南方一宮或自天大王  
長祿元年十二月三日於大河内御所為赤松黨被切害薨

● 忠義王 称河野宮或南方二宮  
長祿元年十二月三日於河野谷御所為赤松黨被切害薨

● 尊雅王 犯擁神璽吉野山中為御所  
長祿二年八月廿八日於高野上高福寺依兵創薨

文政四年三月廿九日

伴信友謹稿

210.4
/

